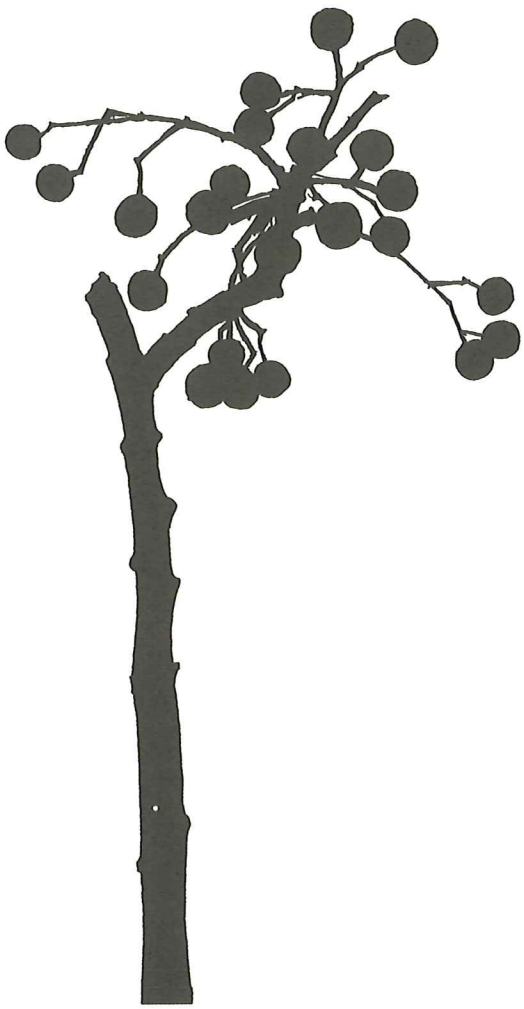
懐かしい未来をとり戻す

辻 信一
tsuji shinichi



●「未来志向」という呪縛

子どもの頃、学校で未来の予想図を描かされたのを覚えています。その後も、いろいろな機会に子どもたちの描く未来図を見てきました。そこには、まるで決まりごとのように、ロボット、超高層ビルやタワー、空を飛ぶ気球や飛行機、複雑に交差する高速道路のループやモノレールなど、コンクリートと鉄とガラスとプラスチックからなる風景がありました。未来といえば、そういうものを連想するようにと、子どもたちはいつの間にか訓練されていたのでしょうか。

今にして思うのです。それは自分がそこに住んでいることを想定しない、自分なしの未来図だったな、と。自分が暮らしたくもない、そして、自分の子孫にも暮らしてほしくないようなものとしてしか未来が思い描けないとすれば、それはあまりにも悲しいことです。

講演などで、ぼくがスローでエコロジカルな暮らしへの転換を説くと、「でも、昔に戻れということじゃないですよね」という反応がときどき返ってきます。「戦前に戻れというのか」から「原始時代に戻れというのか」まで。そこには、「戻る」という言葉に対する嫌悪感や不安や恐怖が顔をのぞかせています。「戻る」は、人生や社会を「前へ進む」ものというイメージでしか捉えることができない者にとってのタブーです。

逆に、過去へのこだわりは、「後ろ向き」で、人を過去へと引き戻す力となって、前へ向かって進むエネルギーを削ぐことになりかねない、と多くの人が感じてきました。

そして今、憲法九条をなんとか葬ろうとする人たちが、「未来志向」ということばを盛んに使っています。そして世間に、「護憲は時代遅れ、改憲は新しい未来志向」というムードをつくることに成功しつつあります。例えば、改憲派の先頭に立つ、ある国会議員はこんなふうに言っているそうです。「情報化、グローバル化社会に対応する、前に進む憲法にするのか、現状維持、回顧趣味的な憲法のままでいいのか。そこが問われている」。そして、彼はこうも断言します。「憲法をめぐる対立軸は、もはや『右』か『左』かではな

い。『前』か『後』か、だ」注1。

しかし、ぼくたちに今、本当に問われているのは、「遅れている」という非難を覚悟して、あえて後ろを向く勇気ではないでしょうか。速さに対しては遅さを、「進んでいる」の前には「遅れている」を、静かに置いてみる。そして、進歩への熱狂を冷ますための、かすかな風を起こすのです。「前か後か」、といった脅迫じみた二者択一の向こうへと越え出ていくために。

●懐かしいつながり

言語人類学者ヘレナ・ノーバーグ・ホッジが、北部インドの国境地帯に住むラダック人について書いた名著には、『懐かしい未来』という邦題がつけられています注2。彼女によれば、これまでいわゆる先進国では、GDP（国内総生産）やGNP（国民総生産）などで示される消費の量、科学技術の進歩、経済的な効率性や生産性などを、「豊かさ」――つまりどれだけ進んでいるか、あるいは遅れているか――の度合いを計る指標としてきました。しかしラダックの地で彼女が見たのは、社会が「進んで」、「豊かさ」が増えるほど自然環境が悪化し、文化やコミュニティが壊れ、人間関係が希薄化するという事実でした。

しかしその一方で、ラダック人の間に、社会を評価するときの先進国的な基準そのものに問題がある、という新しい意識が広がっていくのをノーバーグ・ホッジは見ました。これからは、社会的に人々が幸福かどうか、環境面では人と生態系の関係が持続可能かどうか、といったこれまでとはちがう物差しで社会の豊かさを計ることにすればいいのではないか。「豊かさ」についての、こうした反省の気運が盛り上がり、やがてそれが、「ラダックらしいもうひとつの道」を模索する運動へとつながっていきました。

それは、「開発」や「進歩」を奉ずる欧米型の主流文化から見れば、「過去への後戻り」と映ります。歴史の流れへの逆行であり、反動であり、後退。頑迷な保守主義であり、伝統主義である、と。これについてノーバーグ・ホッジは次のように言います。

> 私たちの主流の文化では、直線的な進歩が善しとされ、そこでは私たちの過去や自然の法則から解放されることがゴールである。「私たちは後戻りができない、後戻りができない」という現代の真言は、私たちの考えに深く染み込んでいる。もちろん、たとえ望んだとしても、私たちは後戻りはできない。だが、私たちの未来への探求は、必然的に、人間も含めた自然とのよりよい調和の中にある基本のパターンに回帰するに違いない。
>
> （二三五頁）

「戻る」というのは、過去に戻るのではない。後に戻るのでもない。われわれは、ただ「大地とのあいだに古くからあるつながりへと、螺旋を描いて戻って」（二三四頁）いくだけだ。ノーバーグ・ホッジはそう言うのです。それは、何百年、何千年と存在してきた古くて新しい価値観の発見であり、再発見なのです。

●世界を冷ます

ミャンマー（ビルマ）のエーヤーワディ河デルタ。そこでは、破壊されたマングローブ生態系を再生するための植林事業が進んでいます。現地のNGOとともにこの事業に取り組んでいる、日本のNGO「マングローブ植林行動計画」の一員として、去年から今年にかけて二度、現地を訪れました。

広大な湿地帯のなかに点在する村々に、僧侶たちが自ら植林している僧院がいくつかあると聞いて、ぼくと仲間たちはそのうちのふたつを訪ねてみることにしました。小さくて貧しそうに見える村にも、それなりに立派な寺院や僧院があり、たいてい数人ずつの僧や修行中の小坊主がいます。仏門に入ったものは、生産活動に従事してはいけません。敬虔な仏教徒である村人たちが、喜捨を通じて寺を立ち上げ、支え、僧たちを養っているわけです。そのほとんどが月収千円にも満たない人々であることを思えば、寺の存在自体が一種の奇跡のように見えます。

「植林を僧の務めだと考えるか」、というぼくたちの質問に、ふたつの村の僧院の住職はこんなふうに答えました。「二十年、三十年先に僧院を修理したり、建て直したりすることが必要になる。僧の務めを果たすには僧院が必要であり、その僧院のために必要な木を育てることは自分たちの仕事でもある」と。また、ふたりは、建材を確保するということ以外にも、木を植えることにはさまざまな意義があると、次のように語りました。「木は日陰をつくってくれる。それは森を形づくって、気候をも穏やかで安定したものにしてくれる。森にはさまざまないのちが集い、緑は人々の心を和らげてくれる。仏様たちは、緑豊かな場所に行くことや住むことを好まれ、木の下で瞑想された」と。

ぼくは、最近気になっていることについて僧たちの意見を求めました。「アジアの各地で鳥の病気が流行って、何千万という鶏が『処分』されている。牛などの家畜でも、養殖魚でも似たようなことが続発している。こんなことをしていて人間に罰が当たらないだろうか」と。彼らは、電気のないこの辺境の地にあってもそのことを聞き知っていました。ひとりの僧は、温暖化をはじめとする地球環境の悪化が関係しているのではないかと考え、「憂慮している」と語りました。

もうひとりの僧はこう言います。「鶏を殺すことも生き埋めにすることも人間の所業。仏教の教えには因果応報ということがあり、自分がしたことは必ず自分に返ってくる。人間も動物も生きものだ。人間のためばかりでなく、すべての命のためにお経を読み、慈愛を送り続けねばならない。それだけが私にできることであり、私がここで毎日していることである」と。そして彼は請われるままに、少し首を傾げ目を半ば閉じて、歌うように滑らかに、全生命界に向けてメッセージを送り始めました。

ミャンマーの人々の間には、「熱さ」についての独特な考え方があると指摘されています。人間の心や人間関係が熱くなり過ぎないようにと格別の注意を払う、と言うのです。その意味では、僧たちが古代からほとんど変わらぬ生活を送り、瞑想や祈祷に専心するのも、この世界が熱くなり過ぎないようにするためだと言えるかもしれません。生産活動にいそしむ俗人たちの分まで、熱くなりがちなこの世界の「温度」を冷ます役割を担っているわけです。まるで団扇でパタパタと扇ぐような僧たちの、一見古めかしくささやかな行動が、しかし、この世界をなんとかギリギリのところで支えている、という気がしてならないのです。

●遅れているという快楽

ぼくが教えている学生が、詩人茨木のり子さんの「時代おくれ」という詩を贈ってくれました。その学生は、ぼくの時代遅れぶりをこの詩に見たのか、あるいは時代に合わせ過ぎているぼくの生き方への反省を促したかったのか。その詩は次のように始まります。

車がない
ワープロがない
ビデオデッキがない
ファックスがない
はたから見れば嘲笑の時代おくれ
けれど進んで選びとった時代おくれ
もっともっと遅れたい

「選びとった時代おくれ」というところに、詩人の誇りとすがすがしい気概がのぞいています。しかしぼくは、「もっともっと」という強調のなかに詩人の強がりをも感じてしまいます。思えば、「進んで選びとった」と言えるものが、ぼくたちの暮らしのなかにどれだけあるでしょう。まして、あえて選びとらなかったものがどれだけ？

またこんなことも、ふと考えるのです。進んで選びとることが、選びもしないでなんとなく手に入れることより良いとは限らない、ということ。思えば、ぼくたちの人生のほとんどは進んで選びとったとは言えないもので満ち満ちている。ぼくのいのちだって、ぼくが選びとったものではない。選びとったものが輝くのは、その無数の選びとらなかったも

のたちのおかげだとも言えます。

にも関わらず、ぼくは詩人の「もっともっと遅れたい」という言葉に深く頷くのです。それは単なる強がりを越えて、さらにその向こうまでズンズンと胸を張って歩いていきます。それはぼくに詩人の快楽を伝えます。"うん、遅れることの快楽って確かにあるよね"とぼくは頷きます。進んで遅れる快楽もあり、気づいていたら遅れていたという快楽もある。遅れていることに気づかない快楽もある。

この詩の終わりのほうに、こんな情景が出てきます。

旧式の黒いダイアルを
ゆっくり廻していると
相手は出ない
むなしく呼び出し音の鳴るあいだ
ふっと
行ったこともない
シッキムやブータンの子らの
襟足の匂いが風に乗って漂ってくる
どてらのような民族衣装
陽なたくさい枯草の匂い

時代遅れには、こんないいことがあるのです。ある日こうして、思いがけないすてきなプレゼントが届く。シッキムやブータンからの風！　だから時代遅れはやめられない。

そもそも、進んでいるとか遅れているとかというのは相対的なことで、何かの基準に照らしてはじめて言えること。シッキムやブータンが遅れているというのは、GDPとかGNPという物差しを当て、開発理論や社会進化論の予定表に照らして言われること。日本が進んでいるって？　いったいどこがどう進んでいるんだろう。ブータンという国では、国王がGNPの代わりにGNH（国民総幸福）という物差しを使うことを提案したと言います。モノやお金の量のかわりに、人が幸せかどうかで、社会の発展や成熟の度合いを測ろうというのです。

車、ワープロ、ビデオデッキ、ファックスをもつことには、もちろんそれぞれに伴う快楽があるでしょう。しかしそのことは、それらをもたない快楽が否定されることを意味しません。また、もつ快楽がもたない快楽より進んでいて、優れているということも言えません。もちろん、もたない快楽が、もつ快楽よりも進んでいて優れていると言えるわけでもありません。快楽は快楽であって、主観的であり相対的なもの。あなたの快楽は快楽ではないと、どうしてぼくに言えるでしょう？

しかし、それでもぼくたちは、もたない快楽とか、遅れている快楽とかというものがあり得るのだということを、よくよく肝に銘じておいたほうがいいのです。なぜなら、もつ快楽と進んでいる快楽が、ますます大きなはた迷惑となって、耐え難い苦痛を遠く近く振りまくので、そこいら中から抗議の声が上がっているのです。いやそればかりではありません。今や、もつ快楽は自らの重みに耐えられなくなって苦痛へと変質し始めています。もはや苦痛に耐えられなくなったとき、もたない快楽というものがあるということを知っていることが、大きな救いになるのではないでしょうか。

茨木のり子さんの「時代おくれ」という詩は、先に引いたシッキムやブータンの子らのイメージに続く次の三行で、終わります。

何が起ころうと生き残れるのはあなたたち
まっとうとも思わずに
まっとうに生きているひとびとよ

「まっとう」であること。それは、「前へ進む」という呪縛から自由であること。詩人の当初の強がりや誇りも、ここにはもう見あたりません。消えてしまったわけではないでしょう。たぶん、まるで液体が気体に変わるように姿を変えて、軽々と愉しげに舞い上がったのです。

注1　民主党衆議院議員、達増拓也氏の発言。「改憲という気分」朝日新聞（二〇〇四年八月十日）による。
注2　以下、引用はヘレナ・ノーバーグ・ホッジ『ラダック――懐かしい未来』（『懐かしい未来』翻訳委員会訳、山と渓谷社、二〇〇三年）より。

（つじ　しんいち・文化人類学者、明治学院大学教授）
新刊書に『スロー快楽主義宣言！』集英社